

## 黄綬褒章を受賞した友人



今年の秋の受賞で、私の旧友が黄綬褒章を受賞された。

黄綬褒章とは産業界の第一線で、その道一筋に業務に精励し、他の模範となる技術や事績を挙げた者に与えられる栄誉ある褒賞である。その世界に疎い私はその一報の意味を理解することができず、失礼ながら、何度も聞き返したが、感動叫びに変わり、涙が出た。

彼の名前は瀧島英夫氏（78歳）(株)防災整美の代表取締役社長である。創立は1982年（昭和57年）1月、業種は「消防設備保守業」における褒賞である。

瀧島氏の前後に記載されている受賞者には染色仕上工・卓越技能、ソムリエ・卓越技能、航空機操縦業務（パイロット）貴金属細工加工・卓越技能、文化財保護業務等とまさにその道一筋に業務精励し社会に貢献し、業界の模範となっている人達である。

私が開業して、初めて会社設立に携わったのが氏の会社であった。私の開業は1979年8月、顧問先はゼロで生活は成り立たず、学習塾・ベストピアを開業して生計を維持していたころ、あるご縁で東京に住む氏が神奈川の西ノ端に足を運んでくれたのが1981年の夏頃であった。人なつっこい氏に小学生であった息子がよくなつて相手をしてもらっていた。

瀧島氏が単独独立の決意をするには諸難障害少なからず多少の時間を要したが、私の直感で独立を決意してもらったかも知れない。独立を決意してから氏の行動は勇猛果敢で私は驚きの連続、そのスピードに追いつくことができなかった。

氏は得意先ゼロの状態で東京の中心地に本社を構えた。社名は「防災整備」とする予定であったが、氏の理念を聞き出して「防災整美」に代えてもらった。今日まで



39年間と長いお付き合いとご支援を頂いているが、氏が私の意見を聞き入れてくれたのは、この社名変更だけであったと思っている。

東京での活動が始まり、技術者と事務員とを雇い入れることになった。ハローワークはまだ職業安定所と言われていたが、そこに出した求人案内は「完全な週休2日制」であった。大企業並の採用条件に優秀な人が応募してきたが、雇い入れることが出来る人は数名であったので選考には苦勞した。氏は社長であり、営業マンで一人奔走で休日はなく、現場では徹夜で働き、その丁寧な働き振りは発注者に安心感を与え、仕事は順調に増えていったが、氏は全てを請け負わなかった。小と言えども氏には矜持があった。当時流行していた「半値八掛け二割引」の誘惑には負けなかった。

3年も経たないある日、本社を立派なビルのワンフロワーを借りて移転した。氏の報酬はまだゼロであった。新入社員には業界の経験のない若者も採用され、教育して必要な資格を取得させるという広い門戸を開いていた。営業方針は「丁寧な仕事、安心してもらえる仕事」をモットーにして、率先して現業に従事しつつ社員教育に励んだ。

経理総務の仕事はすべて事務職員に任せた。金銭出納帳の管理も徹底して任せ、公私混同を絶対にしなかった。

移転したビルの100m位の所に日本橋税務署があった。設立から10年程して税務調査が入った。調査は決まって3年毎に、ベテランと新人の二人の調査官がペアでやってきた。追徴されるようなことは何も無かった。調査立ち会いは私の仕事であり、調査の回数が多いので事情を調べてみた。防災整美は税務署にとって新人教育に相応しい会社であることが分かった。規模は大きくはないが、経理システムは模範的で調べたい帳票が揃っている。追徴が目的ではなく、調査の手順を教えるに真に適切な題材を提供できている会社であったということが推察できた。

仕事も増え、時折断り切れない大きな工事を引き受けざるを得なくなった。幸い氏を尊敬する協力会社は複数存在して、適宜適切な協力をしてくれている。防災整美は設立当初から手形を発行しないことにしている。協力会社への支払いは現金である。大きな工事の代金回収は数ヶ月を要する。ここで必要な繋ぎ資金が必要になるが、それは社長の立替をもってなされている。瀧島英夫氏には「弱い者を困らせない」という信念が一貫している。

多くの社員が育った。中には氏の「優しさ」を利用して身を処した者もいる。独立をしたものもいる。去る者は追わないが、独立したものには支援を惜しまなかった。地道な業界であるので世間から注目をされる派手な会社ではないが、家庭における初期消火器から、大きなビルのスプリンクラーに至る幅広い技術と指導力を発揮して40年を目前にした受賞に一番驚いたのはご本人であった。現在社員数は15名である。各人のデスクは両袖付きの大型であり、整理整頓は書庫に至まで行き届いている。小さなことを「コツコツ」と積み上げた歩みが感じられる会社である。

このような会社が受賞することは、中小企業の経営者には一つの励みになる。誰でも社会からは認知されたいという欲求をもっている。その欲求の為だけに走る派手な会社もあるなかで、誰にも知られず「モクモク」と業務に精励することの意義が認められるということは、暗雲漂う社会の中で「希望」が見える爽やかな朝の光のようである。

瀧島英夫氏が後顧の憂い無く会社経営に専念できたのは奥様の助力のお蔭である。無報酬に愚痴を言わず、家庭を切り盛りして子育てをしながら団体役員として長年奉職され、氏の会社には一言も言及されることは今日に至るまでない。この夫婦の信頼関係こそほむべきかなである。

長年のご支援に感謝をもって、この度の栄えある黄綬褒章の受賞を心よりお慶び申し上げます。

追記、去る11月17日、妻と私は瀧島英夫氏に招かれて「人形町今半」でご馳走になった。この日の予定は受賞の数ヶ月前から予定されていたもので、期せずして、お祝いの席に変わったことは、特に猛威振るうコロナ下の中での記念の宴となったことを記したい。